令和　5　年度　　園評価書

園番号　14　園名　静岡市立藁科こども園

Ⅰ　経営の重点に関わること

評価段階（A：よくできている　B：概ねできている、C：あまりできていない、D：できていない）

1　教育・保育目標	2　重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
心豊かな たくましい子	自分で・ みんなで・ 夢中になって遊ぶ ～考えよう・伝えよう・優しさいっぱい～	・安心して生活する中で、「～したい」という思いをもち、試したり工夫したり新しいことに挑戦したりして意欲的に遊ぶ	○保育者との信頼関係が築かれ、安心して自分の思いを表現する中で、好きな遊びに進んで取り組んでいる ○自分で考え、形にしようとする姿が増えている ○友達と伝え合い、子ども同士で作り出そうとする姿が増えている ○廃材コーナーの充実や室内外の環境の工夫を行うことで、“次は何をしよう”と期待する気持ちをもち、楽しんで園生活を送ることができている	A	A	○全職員が子ども一人一人に寄り添い、一貫性、系統性のある教育保育が行われている ○少人数の利点や地域の自然を活かし、子どもたちの興味関心を刺激しながら思いが膨らむ環境設定を行っている。一人一人をよく観察し、子どもの思いの芽生えを見逃すことなく豊かな遊びに繋げ、友だちとの関わりを生み出し、思いを実現させている。子どもたちは遊びに没頭することで、感受性や集中力、行動力を高め一人一人の豊かな毎日と健やかな成長に繋がっている。子どもから発し、満足感充実感を育む保育活動は、子どもの自己肯定感を高めるものであり、これからの変化の激しい社会を主体的に生きぬく力となりえる ○職員がモデルとなって挨拶を交わし合ったり、子ども同士の関係性を把握して少し距離を置いて見守ったりすることで、自らの力でよりよい関係性を作ろうとする機会を大切にしている。またグループ活動やクラス活動等人との関わりが生まれる場や自分の思いを伝える場を意図的に設定し、他者の気づきや感動に共感したり相手を思いやったりすることを価値づけている。幼児期に自分とは違う他者の思いに気付くことは思いやりの心を育む第一歩であり貴重な経験となっている ○毎月の計画を立て、偏ることのない様々な経験が出来ている	○自分で考えたり工夫したりする姿は出てきているため、子どもの思いに共感したり認めたりして自信をもってやってみようとする姿につなげていく ○“こうしたい”“もっとこうしてみよう”と子どもが思ったとき、子ども自身が考えたり工夫したりしようとする姿を認め、子どもが自分自身で遊びを進めていくことができるよう保育者が関わるのか、見守るのかを見極める力が必要である。見守りも関わりの一つと考え、援助していきたい ○持ち運びができる用具や教材、素材等を用意し、子どもが自分で遊びを作り出せるような環境づくりをしていく ○生活に必要な挨拶を保育者も一緒にしてみることで、様々な人に挨拶する姿につながるようにしていく ○必要な時は保育者が仲介し、相手に思いを伝える方法や伝え方を一緒に考え、適切に相手に思いを伝えられるようにしていく
		・安全かつ活動意欲が満たされる環境のもと、様々なことに興味、関心を持ち自ら関わり夢中になって遊ぶ	○廃材コーナーの設置や、様々な教材や用具を用意したり室内外共に製作ワゴンを用意する等置き方を工夫したりすることで子どもたちが興味を示し、自分たちで試行錯誤しながら繰り返し遊ぶ姿がある ○可動式用具を自ら手に取り遊び場を作り友だちや異年齢児との関わりを楽しみながら遊んでいる ○翌日も繰り返し遊びを楽しみたい思いや友だちと遊びを共有したいという思いが受け止められる環境の中で、次への遊びへと進める力がついている	A	A		
		・進んで挨拶をする ・友達と関わる中で自分の思いや考えを伝えると共に、相手の思いに気づき、協力することや思いやりの心が芽生える	○●保育者が手本となり登降園時に挨拶をする子が増え相手の目を見て挨拶できるようになってきたが、園外に出ると自ら進んで行う等は少なく保育者が行う姿を見て挨拶をすることが多い ○友達と遊びたい・協力して遊びを楽しみたい欲求が見られ、友達の提案に「いいね」と応えている ○保育者の仲介によって相手の思いに気が付いたり、思いを相手に伝えようとする姿が見られている ●言葉の使い方や伝え方が適切でなかったり思いを通そうとしたりする等、保育者の仲介が必要である	B	A		

Ⅱ　各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	・発達の連続性を考慮し、一人一人の発達や経験の差を把握、理解した上で、学年目標に向けた教育保育を実践している	○月１回、全体で月反省を行うことで子どもの様子を職員間で把握できている ○月末や週末の振り返りから子どもの遊びの実態を捉えたり、発達や興味に応じた計画をたてたりすることで子どもたちの思いに寄り添った遊びの提供ができている ○毎日の振り返り時にクラスの様子を伝え合うことで、発達や遊びの様子を共有し、園全体で子ども一人一人の発達や遊びを支えられるようにしている	B	A	○発達を考慮した上で、「遊びを通しての学び」という一貫した方針の下、つながりのある教育保育を行っている。一人一人の育ちを全職員で多面的に捉えて成長を促し、またその子らしさを伸ばす教育保育が行われている ○“遊びこむ”ということは難しいことである ○遊びの中で、人数が少ないというこの園ならではの課題がある ○保護者アンケートからも多様性への対応が出来ているという結果が出ており、いろいろ考え工夫して保育していると思う ○生活習慣が身につくよう、発達に合わせて視覚的にわかる支援が提示されている。また、子どもの様子を保育者から保護者に伝えることで家庭でのフォローがしやすく、連携が図れている ○食育の日の内容や季節の食材など、子どもたちが興味をもてるような内容を取り入れており、また保護者への掲示もされ、伝わりやすい配慮がなされている ○その子に合った支援がなされていると思う。会議などで支援の仕方を共有することで、多方面から一人を見る、ということがいいと思う ○支援児を育てる、ということはもちろんだが、周りの子も共に育つことが大事である。また、課題にも出ていたが、様々な保育者が関わることで支援に偏りなく、よりよい支援になっていくと思う ○教育構想を元にした遊び改善構想の研修テーマが考えられており、それに沿って各クラスの保育計画が作成されている ○保育者は園の運営方針を理解し、子どもの具体的な姿で確認しながら教育活動を進めることが、評価改善システムを強固にし、PDCAサイクルを確立させている ○園の運営方針や保育の成果を子どもたちの姿で保護者に伝え、家庭との連携を推進している ○少人数の職員集団ではあるが、その中で話し合い研修を進めていると思う。公開保育など、外部の方に見ていただいたり意見をいただくことで多くの考えを取り入れられるようにしていくのも良いと思う ○環境については、年齢に合わせた環境づくりが出来ていると思う ○月のお便りに園での活動や子どもの様子が写真の掲載をするなどわかりやすく伝えられている ○送迎時に一日の様子や活動の内容など伝え、保護者が園での様子を知ることができ安心に繋がっている ○近隣の小学校や他園との交流があり、子どもたちにとって良い刺激や気づきを得る機会となっていると思う。小学校でのお化け屋敷体験では、その経験から自分たちがおもてなしをしたい、という気持ちが生まれ成長に繋がるなどよい関係があると思う ○コロナ生活が明け、様々な取り組みが復活したこともあり、地域の行事への参加やおしゃべりサロンの人数の増加傾向など、良い方向に進んでいるのではないかと思う	○月１回の会議やケース会議、週案検討や毎日の振り返りの中で、子どもの様子や保育の内容を職員間で話し合い共有することで、園目標や学年目標に向かって同じ意識をもって教育保育を実践できるようにしていく
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	・１号認定児と２号認定児の生活リズムの違いを踏まえた配慮がなされ、子どもが安心して園生活を送っている	○年齢や発達に合わせ、午睡の時間や過ごす場の工夫をしている ○子ども自身が自分の生活の流れを把握し、リズムも安定して生活できている	B	A		○午後の時間の保育室の使い方や環境の工夫をし、１号認定児と２号認定児のそれぞれの生活を保障できるようにしていく ○一人一人の様子や伝達事項を職員間で共有し、園と家庭とが連携できる体制をつくるようにしていく
	(3)環境を通して行う教育及び保育	・子どもが、園内及び地域の豊富な自然に触れ、その大きさ、美しさ、不思議さなどを全身で感じる体験をしている	○どんぐりに愛着をもち名前を付けたり顔を描いたり、またさつまいものつるでリースやブレスレットを作る等、一つの素材でも様々な使い方を楽しみ、園ならではの自然に触れ遊びに活かしている ○虫取りや水遊びなど、豊かな自然に触れて遊ぶ中で、色や大きさの違い・冷たさや温かさを感じ環境を通して体験することが出来ている ○園内の畑を使ってジャガイモやさつまいもなど季節の野菜を育て、収穫の経験をしている ○季節ごとの自然（イチョウの葉やドングリ、氷や霜柱など）の変化への気づき・発見ができる	A	A		○豊富な園内外の自然を教育保育に取り入れ、様々な体験を通して興味関心を深めていくことができるようにしていく ○身近な教材や素材の中に自然物を取り入れたり、季節の野菜や草花を栽培したりし、季節を身近に感じられるような経験ができるようにしていく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	・避難訓練、不審者訓練を実施し、課題を明確にし次につなげている ・ヒヤリハットを記録し事故を防ぐ ・子どもが自分の身を守る方法を身につける	○年間計画に沿って、毎月の避難訓練の実施、不審者訓練を行い、様々な場面を想定して訓練を行ったことで子どもが自身の身を守る方法を身につけてきている ○毎月の訓練後職員訓練を行い、消火訓練・簡易トイレの組み立てや発電機の動作確認・非常食の確認など、災害に備えた訓練を実施している ○事前予告なしの訓練や早遅番時の避難訓練・不審者訓練を行うことで、園内のどの場所・時間でも安全に子どもを守ることができるようにしている ○ヒヤリハットはすぐに記入・報告し、打合せノートに貼って職員間で周知し、大きな事故につながるのを防いでいる	B	A		○年間計画を立て様々な場面を想定した訓練を実施したり、予告なしの訓練を行ったりする中で、臨機応変に対応できる力を養っていく ○危険箇所があった時には状態の把握・職員間での周知をし、安心安全に過ごせる環境づくりを行う ○どんな小さな気づきも見逃さず、ヒヤリハットに記入する習慣をつけていく
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	・生活習慣の自立に向けて、家庭と連携を図りながら一人一人に寄り添う援助をしていく ・食育活動を通して食への関心を高める	○身辺自立に向け一人一人の発達状況に応じて援助したり見守ったりしながら無理なく身の回りのことが出来るようにし、家庭との連携を図っている ○自分で育てた野菜の生長に興味をもち栽培･収穫･調理することで食への関心を高めることができた ○毎月の食育の日には季節にちなんだ食や食材について、また子どもたちの身近な食べ物・お菓子を取り上げ、子どもたちが食に興味をもてるようにしている ○玄関に食育のつどいの活動内容を掲示し、保護者にも伝え、家庭との連携を図っている	A	A		○家庭での様子を聞き、連携を図りながら一人一人の発達状況に合わせ、援助の仕方を考慮し身辺自立できるようにしていく ○季節や行事に合わせた食育をテーマにして、食に対しての興味関心を深められるようにしていく ○季節に合わせた野菜を栽培・収穫することで食べる楽しさを広げていく
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	・一人一人の発達、特性を把握した上で、支援計画を作成し職員の共通理解のもと支援している。 ・関係機関との連携を図る	○サポートプランの作成後（３か月ごと）保護者との面談を実施し、その子の特性に応じた関わりや支援を職員で考え実践出来ている ○他機関に通っている園児については施設の職員が来園し、様子を伝え合い連携を図っている ○会議の際、支援児の様子や支援方法を伝えることで職員への周知が図られ、情報の共有ができてきている ●担当以外の職員と関わる機会が少ない	B	B		○担当保育者だけではなく、様々な保育者が関わる体制をつくり、多面的に捉えてより良い支援が出来るようにしていく ○他施設と連携を図り、子どもが戸惑うことがないよう園・家庭・他施設が同じ方法で支援できるようにしていく
5 組織運営	(1)組織体制の充実	・一人一人の力が集まり、大きな力となって園を運営していくという自覚をもち、自分の役割を果たしている ・他の分掌の仕事内容も知り、協力し合う	○職員の人数は少ないが、会議等でそれぞれの分掌の行事内容、進捗状況を職員間で周知し、分掌担当をリーダーとして全員が協力して行事に取り組んだり、円滑に進むよう意識している ○運動会・劇場ごっこなど大きな行事では、担当の職員を中心に計画表を作り全体で協力して行っている ○進捗状況がわかるように表を作り、職員全体で把握・協力できるようにしている	A	A		○分掌の担当が中心となり、行事の立案・進捗状況の把握・進行をしていく。その上で全職員で協力して実践するようにしていく
6 研　修	(1)研修体制の充実	・研修テーマ『もっとやりたい　もっとこうしたいを支えるための援助』に沿って園内研修を行い、学びを保育に活かしている	○研修テーマを基に研修を行い、園全体で園児の様子や課題について話し合い保育に活かしている ○遊び展開図を作成し、会議で話し合うことで子どもの実態に合わせた遊びの見取りが出来ている ○遊び展開図の書き方を工夫していくことにより全職員が共通理解できるようになってきている ○各クラスの公開保育を実施し、自身の保育を振り返り関わり方や環境構成を学ぶ機会としている ○遊びの中で考えたり試したりする姿に寄り添い、一緒に考え楽しむことを大切にし保育している ●全職員が共通理解して実践していく難しさを感じている	B	A		○研修テーマを基に公開保育を行い課題だと感じたことについて話し合い、よりよい保育に繋げていく ○職員間で研修テーマに沿った教育保育をしていくことが出来るように、会議に出ていない職員を含め全職員で事後研修で話し合った内容を共通理解して取り組んでいく
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	・安全点検を行い危険個所を把握し、修繕する ・一人一人の興味、関心を捉え、遊びの充実感が得られる環境を構成している	○毎日の早番点検や毎月の安全点検を確実に実施し、危険個所を見つけた時はまずヒヤリハットを記入し職員に周知し、適切に修繕し安全に過ごせるようにしている ○子どもの遊びや興味関心を把握し、自分で考えたり試したりしながら遊び場をつくっていけるように、子どもが動かしやすく運びやすい用具を用意したり、置き場を工夫したりしている ○廃材コーナーを設置することでいつでも作りたいものを作ることが出来るようにしている	B	A		○園内研修を行い、子どもの姿、遊びの興味について話し合い、子どもの育ちや遊びの展開に沿った環境を整えていく ○子どもが自分から“やってみたい”“もっとこうしてみたい”という思いを実現できるよう、選んだり運んだりできるような教材や用具を用意しておく
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	・園での取り組みや子どもの姿を、お便りや写真掲示等で保護者に伝えている ・日々の伝え合いや保育参加会、面談を通してより良い信頼関係を築いている	○園便り・クラス便りや玄関掲示で活動内容や遊びの発展・経過を写真を用い視覚的に保護者に伝えたことで、保護者も関心をもち保育内容の理解につながりやすかった ○保育説明会、年２回の保育参加会・面談を行い、教育保育の内容や一人一人への対応を家庭と共有できた ○決められた面談だけでなく保護者との話の中で必要に応じて面談をする機会を作り、保護者との信頼関係を築くことができている	A	A		○ICTを活用したお便りの配信や、玄関ボードでの教育保育活動の掲示を行い、園での活動や子どもの姿をわかりやすく伝えていく ○日々の送迎時、保育説明会、保育参加会や面談を通して園での活動内容や子どもの様子を伝え、信頼関係を築き深めていく
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	・公開保育を行うと共に、小学校の公開授業や他園の公開保育を参観し交流を行い、教育保育を通して近隣校、園との連携を深めている	○自園への公開保育に公立園だけではなく小学校や私立園からも参観があり、子どもの育ちや実態を共有することができている。また参加者のアンケートの内容を参考に自園の教育保育に活かしている ○正規職員は一回以上他園の公開保育を参観･事後研修に参加し、学びを自園の保育に活かしている ○南藁科小学校に行く機会をもち（夏のお化け屋敷・田んぼでの泥遊び・ヤギとの触れ合い等）就学への期待へとつなげられるようにした ○清沢・安倍口・服織(どんぐり拾い)こども園との交流を図ることで、他園の友達や他園で遊ぶ楽しさにつながっている	A	A		○自園の公開保育への参加を積極的に呼びかけ、保育や事後研修で多面的な視点から出た意見を自園の教育保育に活かすようにしていく ○他園や近隣の小学校での公開保育や公開授業に参加したり、交流を図ったりし、連携を深めていくことができるようにする
１０ 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	・地域の豊かな人材との触れ合いを大切にし、地域に根差した教育保育を推進する ・地域の未就園の親子が交流をもてるようおしゃべりサロンを開催する	○地域の行事に参加したり施設へビデオメッセージを届けたりし、地域と交流を図っている ○地域に出向いた際、地域の方が子どもに豊かな経験をする機会を与えてくれており、職員以外の大人との交流ができている。また、日頃の感謝を伝えている（芝桜見学・鯉のえさやり等） ○おしゃべりサロン開催の掲示をし、地域の親子の交流や子育て相談ができるようにした。今年度、参加人数が増えている ○おしゃべりサロンで園児が歌や踊りを披露して交流を図る等、園生活への期待に繋げている	A	A		○直接的な交流だけでなく、ビデオレターやプレゼントなど交流の仕方を工夫しながら、地域との交流を通し様々な経験が出来るようにしていく ○おしゃべりサロンを通して園児との交流や園活動の披露をすることで園の様子を知らせたり、参加した保護者同士交流が図れるような内容を計画し子育て支援をしていく